若い力が台頭する年に

新年を迎えた。元旦はいつものことながら、まずは拙宅から徒歩で10分余の氏神様にお詣り。家に戻ってから家内の琴にあわせて尺八で千鳥の曲と春の夜の演奏が定番。その後、31日に栓を開けた伊那市の造り酒屋・仙醸の「年とり酒」で乾杯してから、お雑煮とお汁粉▼７日には顔を出している尺八の会の総会があった。これまで会員を二つのグループに分け、それぞれのグループに講師がついて練習をしてきたが、講師のお一人が高齢化と体調不良で講師を引かれることになり、後釜の講師の手配も容易ではなく、その後のグループ運営をどうしていくかが議論となった▼別途、ある時のお琴屋さんの話であるが、お琴の先生から一時的にお琴を預かっても、お琴をお返ししようとすると、お琴の先生が亡くなっておられることが増えた、とのこと。高齢化がすすむ一方、後継ぎがなくて店仕舞いを余儀なくされているのは農業だけではない▼ところで、昨年の12月中旬、「尺八家・作曲家コラボレーション～古典と現代の衝突と邂逅～」なる演奏会に足を運んだ。田嶋直士、田嶋謙一の尺八の名手である親子が、産安や鹿の遠音等の古典を一方が演奏した後に、この古典をモチーフに作曲された現代曲をもう一方が演奏。古典を味わうと同時に、この一部をモチーフに現代曲として再創造したものの演奏に挑戦するもので、その熱量は大変なもので、大いに楽しませてもらった。田嶋謙一さんは、別途、超流派の尺八グループThe Shakuhachi 5なる、古典のみならず、現代の表現を求め続ける５人グループの一人としても活躍中▼純邦楽の世界も含めて構造は全く同じであるが、純邦楽での若手演奏家の台頭はうれしい。農業の世界での若手農業者の輩出・台頭を期待している。

（土着菌）